

お笑い芸人・志村けんさんから学ぶ

(集会講話のつもりで書きました)

「最初（さいしょ）はグー」。ジャンケンのかけ声は、志村けんさんがきっかけで広まったそうです。お茶の間に、笑いを届けてくれた「コント王」といわれた志村けんさんが、新型コロナウイルス感染症のため亡くなりました。70歳でした。

今の日本で、「志村けん」という名前を知らない人はいないでしょう。子どもから大人まで笑わせることができたのはなぜでしょうか。志村さんが亡くなったあと、新聞には、志村さんのふだんのようすを紹介する記事がたくさんありました。そのなかから、わたしたちの生き方も参考になることを紹介します。

なぜ、お笑い芸人をめざしたのでしょうか。

志村さんのお父さんは、とてもきびしい方でした。そのためか、家のなかは「暗くてたのしくない雰囲気」の日が多くありました。そんなときでも、家族みんなが笑う場面がテレビのお笑い番組。志村さんは「このオヤジ（きびしいお父さん）がわらうのか。この人（お笑い芸人）たちってすごい」と思ったのです。そして、自分もお笑い芸人をめざすことにしました。

志村さんは、「お笑いには、パワーをもらうとか、明日もがんばろう、とおもったりする力がある」「人を笑わすには腕（方法、コツ）がいります」と言っています。人を楽しませる、笑わせるために、いつもわらいのことを考えていました。

お笑いの勉強をいつしていたのでしょうか。どんなことをしていたのでしょうか。

たとえば、仕事の終わりが夜中になり、朝はやくに家にもどってからも、映画を見てお笑いのアイディアを考えていました。ビデオのなかには、日本で売り出されていない外国のコント番組もあり、わざわざ専門の会社から取り寄せしていました。ビデオを早送りして、おもしろい場面だけをふつうの速さにして何度もみていました。

志村けんさんは、みんなを楽しませるお笑いのために、見えないところで努力をしていたのですね。考え方やおこなったことでまねできることができがあれば、参考にしてください。

参考にした新聞記事：

産経新聞 2020年3月31日付「世代超えたコント王」

朝日新聞 2020年4月1日付「志村けんさんを悼（いた）む」（西城昇）



（写真は Web サイトより）